

「東邦大学のルーツをたどる」連載を終えて

連載を終えて

理事長 炭山 嘉伸

2012年6月から始まったこの連載もいよいよ最終回となりました。連載を終え、創立者である額田豊・晋両先生が遺されたものの大きさには、いまさらながら驚嘆する思いがします。最後に、心に残ったエピソードを通じて、今後、本学はどうあるべきか、私の考えを述べたいと思います。

■ 女性科学者の育成に先鞭

まず、本学は、1925(大正14)年に創立された帝国女子医学専門学校をその始まりとしています。なぜ、豊先生は、女子の医学専門学校をつくらうと考えたのでしょうか。わが国では、第二次世界大戦が終わるまで、若干の例外はあるものの、基本的に女性の大学入学は認められていませんでした。ましてや自然科学系の学問など、女性には向かないというのが一般的な考えでした。その一般常識を覆して、医学・薬学・理学・看護学という自然科学系の学問領域を総合的にカバーする学園を創設された。戦前、女子の高等教育機関で、しかも自然科学系の4学科が揃った学校は他に類を見ないものですし、ここに現在の本学の基礎が築かれたわけですから、豊先生の見識には感服するばかりです。

その着想は、明治時代の末に豊先生がドイツに留学した際、科学的・論理的な知識や思考法が、それこそ子どもから大人まで男女の別なく行き渡り、家庭の主婦も非常に合理的に家事をこなして余暇を楽しんでいる。そんな様子を見て、社会の健全な発展のためには、科学教育、なかでも女性に対する科学教育の必要性を痛感したことにあるといえます。この考えは、戦後、資源のない日本が世界に伍していくには科学技術を発展させていくしかない、理数教育を重視した附属中高を開校するということまで、一貫してつながっています。



ドイツ留学中の豊先生(2列目左から3人目)

このような思いに応え、帝国女子医学薬学専門学校・理学専門学校からは、龍知恵子先生(医学科1回生、日本女医会第三代会長、国際女医会理事)、幾瀬マサ先生(薬学科5回生、元東邦大学薬学部部長、花粉研究のパイオニア)、猿橋勝子先生(理学専門学校1回生、

日本学術会議会員、女性科学者の育成・支援のため「猿橋賞」を創設)、五島瑳智子先生(医学科21回生、東邦大学医療短期大学名誉学長、感染症学の女性リーダー)など、のちに日本の医学・薬学・理学・看護学を代表するような数多くの女性科学者が巣立っていました。千葉・習志野と東京・駒場の附属中高も、現在、理系に強い進学校として全国に知られています。

■ 「自然・生命・人間」に込められた意味

また、本学の建学の精神「自然・生命・人間」は、晋先生が1957(昭和32)年に刊行した『自然・生命・人間』という著書のタイトルに由来します。自然・生命・人間——この3つのキーワードに込められたメッセージは、優れて今日的なものです。地球環境・自然破壊の勢いはとどまるどころを知らず、人間を含め、命を軽視する事件が相次ぐ昨今、その意味合いはますます強くなっています。

「何のために自然と人生を探究するのであるか
何のために自分を反省するのか
それは人間らしく生きたいからである
「人間は人間だけで生きているのではない
われわれのまわりには山あり川あり
草あり木あり あらゆるものがある
その中に人間として生をうけたのである
「人間はもともと大自然の一部分として
自然界のうちに生き
大自然のうちに生命を託しているのである」
(額田 晋『自然・生命・人間』より)

と、晋先生はいいます。この建学の精神は、一私学の枠を超えて普遍的な価値をもつものだと思います。

ただ、2011年に東日本大震災が起きた際は、自然というものの圧倒的な力を目の当たりにして、あらめて「『自然』とはいったい何なのですか」と晋先生に問いたい気持ちでいっぱいになりました。日本人ほど、山も川も木も「神」と崇め、「自然」に親しみ慈しむ心をもった民族はいないと思います。それなのに、愛する家族も日々の暮らしも一瞬にして根こそぎ奪ってしまうのもまた、「自然」なのです。私は何度も晋先生の『自然・生命・人間』を読み返し、自問自答を続けました。

しかし、今回、晋先生の生涯をたどるなかで、晋先生が『自然・生命・人間』を著した背景には、10代の初めに祖父と父を相次いで亡くし、その後もご長男の死や森鷗外の最期を看取るなど、近しい人たちの多くの死があったことを知りました。学校創設の前々年には関東大震災が起り、10万5千人もの死者・行方不明者を出しています。先の晋先生の言葉は、そうした悲しみを乗り越え、ご自身が生きていくために考え抜いたところから生まれた言葉だったのです。

とすれば、今、生きている私たち、命を与えられている私たちは、自然に対する畏敬の念と生命に対する尊厳とを心に刻み込み、自らの

命を生ききるしかありません。それこそが、晋先生が「生命は自然からの尊い贈り物である」といわれた意味なのではないでしょうか。もちろん、晋先生の言葉を安易に引いて、東日本大震災でご家族や近い方を亡くされた多くの方々への慰めとすることはできないと思いますが、せめてなにがしかの支えになればと願ってやみません。

■ 社会奉仕の心と感染症研究の伝統

ところで、東日本大震災の時は、本学の付属病院から、のべ44隊、720名の医療スタッフがボランティアを申し出て救援活動を行ったほか、多くの同窓生が支援のために被災地に入りました。私は、同窓会を含め、全学をあげて社会奉仕・社会貢献という本学のミッションを実践されたことに深い敬意と感謝の念を抱きましたが、この奉仕の精神こそ、開校以来、受け継がれて来た伝統でもあります。

『自然・生命・人間』が刊行されたのは戦後ですが、その元となったものは、人格教育を重んじた晋先生が学生たちに自ら行った倫理の講義でした。晋先生は、ただ単に職業としての医師をめざすのではなく、社会人類の幸福のために尽くす人になれと、第一回の入学式で挨拶しています。そのための指針を示したのが倫理の講義であり、それを精緻化し集大成したのが『自然・生命・人間』でした。

このような薫陶を受け、例えば、先述した龍知恵子先生は、同窓会有志とともに、1964(昭和39)年、脳性小児マヒの子どもたちのために社会福祉法人鶴風会・東京小児療育病院を開設しています。社会福祉法人鶴風会は、現在、やはり先にお名前を出した五島瑤智子先生が後援会会長を務めるなど、同窓生の奉仕の精神によって受け継がれています。

また、もう一つ、感染症研究に関しては、本法人第五代理事長の桑原章吾先生、そして今、お名前を出した五島先生が日本化学療法学会の理事長を歴任され、その後も山口恵三先生、舘田一博先生と、歴代の本学感染症講座の教授が日本の感染症研究を牽引してこられました。私自身も、現在、日本外科感染症学会と日本感染症医薬品協会の理事長を務め、看護学部には感染制御学の小林貞祐教授、医学部には真菌症の専門家である澁谷和俊教授がおられ、また私の後任の草地信也教授も第65回日本化学療法学会総会の会長に内定しているなど、今も感染症研究に力を入れています。

この伝統も、豊先生と晋先生が、戦前、結核の治療と研究に力を入れてこられたことによるところが大きいのです。豊先生は、1920年、鎌倉に結核療養施設として額田保養院を開設し、当時、唯一有効な療法とされた大気栄養安静療法の実践と普及に努めました。晋先生は、なんとか結核を根治させる薬物はできないかと研究を進めました。本学には、開校当時、重症の感染症患者の病理解剖をしたプレ



木造校舎の玄関前にて(1925年)
左：豊先生 右：晋先生

パラートが残されています。

龍先生は、晋先生の片腕としてこの研究を進めた一人で、さまざまな細菌の免疫を試すうちに、晋先生が「今度はカビを使ってみようじゃないか」といって、実験に取りかかったことを当時の思い出として書いています。ご存知のとおり、戦後、ペニシリンやストレプトマイシンが実用化されて、感染症も化学療法の時代が到来しました。ペニシリンやストレプトマイシンの素材は、「カビ」です。残念ながら、晋先生が新物質の発見者となることはありませんでしたが、本学の感染症と免疫に関する研究に大きく道を拓くことになったと思われま

■ 選ばれる大学・選ばれる病院であり続けるために

おかげさまで、90周年は良い形で迎えられたと思います。経営的な立て直しも出来、大型設備投資の凍結も解除して、大橋病院の新病院建設への着工、大森病院のダヴィンチ導入やPETの稼働、佐倉病院の放射線治療を中心とした地域がん診療連携拠点病院指定に向けての取り組みなど、大学病院にふさわしい医療の質を維持するために、将来を見越した計画も着々と進んでいます。さらに、大森キャンパス、習志野キャンパスの環境整備も着実に推進してまいりました。

しかし、今後の10年を考えると、あまり楽観的な予測は立ちにくいというのが現状です。少子高齢化により、教育と医療、そのいずれもが大学運営により厳しい条件を課すことになるのは目に見えています。少子化で入学志願者は自ずと減少すると思われま

し、国は、団塊世代が75歳に突入する2025年をめどに、医療を病院完結型から地域包括型へと方向転換することを明らかにし、そのための施策はすでに始まっています。

幸い、医学部の平成27年度入学志願者数は3,000人を超え、学費の値下げ等が効を奏し、優秀な学生が多数集まりました。4学部合計でも、今年も1万人を超える受験生がありました。

どういう時代にあっても選ばれる大学・選ばれる病院であるために、本学の特質である、自然科学系4学部を擁し総合力があるということ、普遍的な価値をもつ建学の精神があるということ、そして社会奉仕・社会貢献の心をミッションとして受け継いでいること、これら豊先生・晋先生が遺された貴重な財産を受け継ぎ、さらに良い大学・良い病院にしていくことが、私たちの使命であると思っています。



医学部本館(現在)